



## Kobe University Repository : Kernel

Title	言語接触の遍在性(Ubiquity of Language Contacts)
Author(s)	西光, 義弘
Citation	神戸言語学論叢 = Kobe papers in linguistics,6:32-43
Issue date	2009-01
Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	publisher
DOI	
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81001519">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81001519</a>

Create Date: 2017-11-22



# 言語接触の遍在性<sup>1</sup>

西光義弘

神戸大学

## はじめに

言語接触の話ですぐに出てくるのは昔も今もピジンとクレオールである。しかしピジンとクレオールは植民地時代の産物であり、現存するのは発生当時の形ではなく、ポスト・クレオール連続体をなしている。ビッカートンがハワイで調査を始めた70年代初期には日系一世たちはすでに相当な老齢であり、早急にデータを取らなければ手遅れになる恐れがあった。幸いにもその調査の結果は二巻の報告書の形で残された。ハワイでの調査によってピジンは基本的に母語を英語による語彙置き換え(relexification)をしたものであるが、英語の語順を取りやすい構文の変異が観察された。すなわちフィリピン系一世のピジン英語はフィリピン諸語の特徴であるVSOの語順を取り、日系一世のピジン英語は動詞を文末に置くという傾向が現れたが、英語的な語順も構文によっては現れるようになっている。

Bickerton & Givon(1976)の研究によれば、日系一世のピジン英語には三段階あり、第1段階の話者基本的に日本語の文法を維持し、単に語彙を入れ替えているだけである。また文法的な骨組みを示すような機能語については日本語がそのまま出ることも多い。

(1) Mista karsan no tokoro tu eika sel shite (ミスター・カーソンのところに二エーカーを売って、)

この例で興味深いのは「売る」を英語のsellで置き換えながら、外来語を日本語に取り入れる場合と同じく「する」をつけていることである。

(2) Shi go muv 1969 ka omou yo. (一九六九年に移ったか(と)思うよ。)

(3) Skul no go natin koko de (学校へは行かんかった、全然、ここでは。)

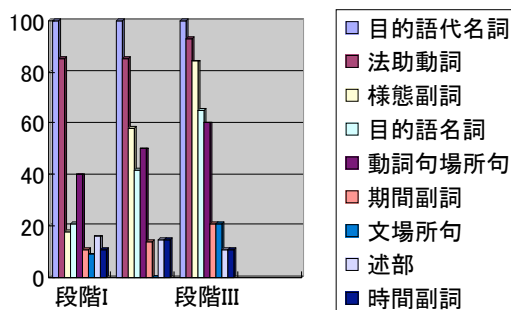
このような例を見れば第一段階の日系一世のピジン英語は文法は日本語であり、単に内容語を英語に置き換えていることは明らかである。第一段階の日系一世のピジン英語でも代名詞の目的語はすべて英語と同じく動詞の後に来る。その次に英語化しているのは法助動

---

<sup>1</sup> 本論文は『月刊言語』2008年5月号に掲載された「遍在性」という論説のほぼ2倍の分量の本来の原稿である。

詞であり、二十四例中二十一例において動詞の前に来る（たとえば **can go**）。単純な語彙入れ替えという考え方ではこういうことは起こりえないはずである。言語獲得においてつながりの強い組み合わせは分解されず、ひとまとまりの表現として獲得されることが広く知られている。ピジンにおいても同様なことが起こっていると考えられる。日本語では代名詞はゼロ代名詞であり、助動詞も動詞と接続した形で用いられるので、日本語の構造自体には代名詞を義務的に、助動詞を独立させて表現する手段を持たない。したがってそのような隙間があるところでは母語の干渉なしに、目標言語である英語の語順を習得できるといえる。

表1 日系ピジン英語におけるS V Xの割合



第三段階の日系ピジン英語では目的語名詞においても英語の語順が優勢になっている。この段階になると英語の語順がある程度取り入れられているが、文とのつながりがゆるい語句についてはまだ日本語の影響も色濃く残っている。

このようにこの時点では第一世代のピジン話者が生存していたので、データを得ることが出来た。ところが、クレオールについては発生後ずいぶん年数が経っていて、ポスト・クレオール語として標準英語の影響をさらに受けているので、クレオールの発生については推測するほかない状態であった。そこでビッカートンとギボンは無人島を用いたクレオール発生実験を計画した。すなわち太平洋上の無人島に **VSO** 言語、**SVO** 言語、**SOV** 言語の話者の夫婦を一組づつ住ませ、子供たちの間でどのような特徴を持つクレオールが発生するかを確かめるという計画であった。このような人間をモルモット扱いする研究計画に研究費が下りるわけではなく、実行はされなかった。しかしビッカートンとギボンにとってはクレオールの発生は歴史上もはや自然には起こらないと思っていたので、ついあせってこの様などてつもない計画を立てたのであった。ところが思わぬところで新しいクレオールの発生が報告された。それはニカラグアにおけるクレオール手話の発生であり、全世界で注目を浴びた。ニカラグアにおいて聾啞者のための公的施設が設置され、それまで家庭内で用いられていた家庭内手話 (**home signs**) を基礎に若い聾啞者の間に共通の手話が発生したのである。これは従来のクレオールと並行的な現象であり、十代後半より年上の

聾啞者はあまり流暢でない習得をした。これは言語習得の臨界期を越えていたので、ピジンとみなすことが出来る。したがってこの両者の手話の構造をデータにより分析することにより、ピジンとクレオールが発生のメカニズムと構造的特徴を明らかにする可能性が生まれたのである。(Senghas(1995)参照)

無人島でピジンとクレオールが自然発生的に起こっていたという例も明らかにされた。十九世紀における小笠原諸島におけるクレオール英語の発掘である。十八の言語を母語とする大西洋と太平洋諸島出身の人々が共同生活を行う中で共通語としての英語を基礎としたピジンの発生である。英語を母語とする人がほかの言語を母語とする人より少々多かったことと英語の威信および有力者が英語の母語話者であったこともあって、英語が上層語として選ばれたと考えられる。しかしこの例はハワイなど他の太平洋地区におけるクレオール発生より前のことであったので、わかるのは断片的な情報のみであり、データを取れる話者は生存していない。したがってビッカートンとギボンが危惧したとおり、すでに自然発生したピジンやクレオールのデータを取るにはすでに時遅しの感があるのは否めない(Long (2007)参照)。ニカラグアの手話が特異なのは既存の共通語としての手話が存在せず、いわば無からピジンおよびクレオールが生まれたのである。現在の交通手段と通信手段の発達により、上層語の標準形からの影響を閉ざすことは不可能となっている。ビッカートンが真のクレオールの条件としてあげた二つの条件のうち第二の条件はニカラグアの手話のような特殊な場合を除いて満足できない状況となっているといえる。ビッカートンとギボンの実験は上層語となった言語の標準形からの影響を断絶できない現在では失敗に終わっていたに違いない。しかし交通手段と通信手段の発達は言語接触を以前にも増して頻繁に起こす状況を引き起こしているといえる。ピジン・クレオール以外の言語接触についてみれば、現代の輸送手段の発達によって、文化接触および言語接触は前代未聞な規模と頻度で起こっているといえる。

ビッカートンの真のクレオールに対する条件

選考するピジンより生じたものであるが、そのピジンは2世代にわたっては存在しなかったものに限る。

人口の多くとも20パーセントが、支配言語を母語としていて、残りの80パーセントが、さまざまな言語集団からなるところに生じた言語。

ビッカートンの挙げた二条件は彼のバイオプログラム仮説を証明するために生得的な言語能力がいわば生の形で出るのを邪魔する要因を排除するためであった。そもそも言語接触はその二条件で押さえられるものではなくて、もっと幅広いものである。そう考えれば、過去・現在において起こっており、また未来に起こりうる言語接触の類型論を確立することが必要となってくる。言語接触に絡む要因を明らかにし、その要因の絡み合いによってどのようなタイプの言語接触がおこるのかをモデル化することが最終的目標となる。筆者

は以前その当時の知見を総合的に考察して、暫定的なモデルを設定したことがある（西光（1990））。

### 言語接触はなぜおこるのか

言語接触はそもそもなぜ起こるのかという根本問題を考えることによって、言語接触の要因を明らかにすることが出来る。トマセロはチンパンジーは相手の意図を読み取ることが出来るが、人間のように相手と意図を共有して協力することは出来ないということが人間は自然言語を所有するが、チンパンジーは言語を所有しないということにつながっているという仮説を提唱した。コミュニケーションによって意図を共有することが可能になる。ジェスチャーなどのボディ・ランゲージによって目の前の状況についての意図を伝えることは可能であるが、複雑な連携を必要とする意図を伝えることは難しい。ともかく複数の人々が同じ環境におかれたときには何らかの方法で意図の伝達を図ることが起こる。この意図伝達の欲求が対人接触の根底にあり、文化接触および言語接触に発展していくと考えられる。接触が確立されるとその接触を維持するための努力が払われることになる。社会言語学における歩み寄り(accommodation)の概念がここで有効に働く。大人が赤ん坊に歩み寄って用いるベビー・トークや、外国人に対して母語話者が用いるフォリナー・トークなどにも見られる。また井上史雄の提唱する「言語変化は年速一キロ」という説も歩み寄りと対面的なインタラクションに基づいているといえる。

### 言語接触における「ている」

『月刊言語』2007年9月号の言語接触特集号においてすでに工藤真由美氏が「複数の日本語という視点から捉えるアスペクト」という論考を寄稿し、言語接触に見られる日本語の「ている」「とる」「よる」に見られる現象を考察している。ここでは今までの考察のケース・スタディとしてデータを広げ、筆者なりの見方によって言語接触の観点から分析してみることにする。

### ハワイ日系一世の stei

まずハワイ日系一世のピジン英語における stei(stay)の用法を考えてみよう。日系二世以降のクレオール英語には英語の進行形に対応する stei の用法しか観察されないが、日系一世のデータには日系二世のクレオール英語には見られない”ai stei plaent”という例があった。これは広島方言の「植えとるんじゃ。」に対応すると考えられる。「とる」と「よる」が中和して単一の stei という形になっているが、広島方言の語彙置き換えが起こっていると結論できる。

### 北九州諸方言における「あっている」

標準語および他の方言では状態動詞である「ある」は「ている」は結合できず、「あつて

いる」という形は非文法的であるが、北九州諸方言では特定の条件下では「ありよう」「あつとる」が可能である。

- (4) 鳥居の前、ゴミん、ありよる。
- (5) 双方に違いが {ありよる/あつとる/あっている}
- (6) テレビで野球がありよる。
- (7) 今、会議がありよう。
- (8) もう、会議があつとる。

(4) では具体物が一時的に存在していることを示している。(5) は抽象物が存在していることを示しているが、その存在が一時的であるという意味は必ずしもない。(6) (7) は出来事が進行中であることを意味しており、(8) は出来事がすでに終わったことを意味している。(6)、(7)、(8) については普通の出来事文と同じく場所が「で」格で示されていることから、出来事文になっているとみなすことが出来るから問題はあまりない。

- (9) 池で泳いでいた。

ただしそれならなぜ他の方言では「あっている」といわないかが問題として残る。これは文法化の進行の程度の違いとして処理できる。北九州諸方言では「ありよる」「あつとる」の形をとるので、動詞との結合度が高いということが文法化を促進したとみなすことも出来る。この場合にも「よる」「とる」の形をとる瀬戸内海諸方言では「ありよる」「あつとる」を用いないという問題がある。つまり「よる」「とる」は「あっている」を可能にすることについては必要条件を満たしているが、十分条件を満たしていない。結局文法化の進行の度合いの問題が残る。少なくともいえるのは「ている」という形をとる結合度のゆるい方言では「あっている」という形が一般に許されないということである。したがって「よる」「とる」の形が促進する方向性を持っているということはいえる。

(4) については一時的ということで厳密には状態文ではないということで説明できる可能性が強い。しかし(5) については状態性を否定することが出来ないので、アスペクトとしての説明は不可能である。

斉藤(2008)は国会会議録および県議会会議録から「あっている」のデータを取っているので、本稿ではそれらのデータを元に再考することとする。「あっている」と「あっていない」の発言の大部分は「ありよる」「ありよらん」が可能な方言の話者によるものであった。しかし無視できない数のそれらの形が不可能なはずの方言の話者が「あっている」「あっていない」を発していたのである。言語接触の立場からなぜこのような事態が生じるのかを考察することは意義のあることと考えられる。

「ている」の機能については高木(1993)などの指摘している(10)のような例に見

られる確認の機能がある。

(10) (スケジュール表を見ながら) 六月五日には沖縄に出張しております。

「ている」は純粋なアスペクト表現ではないということは Shinzato も「ている」を自己観察(observing self)とし、「る」を自己経験(experiencing self)としている。これにより「ている」は自分のことについて言うのは少々不自然であることが説明できる。

- (11) a. 高木君ならさっきそこでお茶を飲んでいましたよ。  
 b. ?私はさっきお茶を飲んでいました。  
 c. 私はさっきお茶を飲みました。

斉藤 (2008) があげている例のほとんどが確認の機能を持った「あっている」「あっていない」である。(12)には「私の調べた範囲では」、(13)では「確かに」という前置きがあり、明らかに確認と認定できる。

(12) 陳情があったということですが、他の駅に急行をとめる地元の陳情と違いまして、私の調べた範囲ではこれという大きい陳情はあっておりません。(中略)私の調べた範囲では強力なる急行停車ということは陳情はなされておられません。(佐賀・田代富士男・1968)

(13) 学校存続に向けて地元から入学者増を図る動きが確かにあっているかというふうに報道で受けているところでございますが(中略)学校存続に向けた地元の運動の中に議員が今御指摘のような動きがあるということは、(青森・花田隆則・2004)

標準語でも活動動詞は「確かに」があると「テアル」形にしたほうが自然である。

- (14) 確かに太郎は6月5日に学校に出席している。  
 (15) ?確かに太郎は6月5日に学校に出席した。

(12)ではそのすぐ後に「陳情はなされておられません。」と言い換えており、これは明らかに確認の例である。また(16)では「あっているのか、あっていないのか」という確認を求める表現になっている。

(16) 沖縄にある企業を元気出させるために、いわゆる法人税等の減免措置をしている。それが実際に効果があっているのか、あっていないのか、(長崎・山田正彦・2003)

「あっている」が純粹のアスペクト表現でないことは(13)において同じ内容が一度目は「学校存続に向けて地元から入学者増を図る動きが確かにあっている」となっているが、その後で「学校存続に向けた地元の運動の中に議員が今御指摘のような動きがあるということは」と同じ内容が埋め込み文で主張的でない(non-assertive)場面では「ある」を用いて述べられている。

また(5)に見られたような「違いがあっている」もみられる。

(17) 一番大きな米ソの立場の違いというのは、この問題を、(中略)グローバルな観点から取り上げるという立場と、(中略)別々だというふうに切り離して考える考え方で、そこに大きな違いがあっているのではないかと思います。(鹿児島・有馬元治・1983)

(18) 経済企画庁との判断が相違しているのじゃないかと、交友後疑念につながったかと思うのですが、(中略)その判断には食い違いがあっておりません。(鳥取・竹下登。1983)

違いや差を問題にする場合は2つのものを同時に観察して、違いを確認するということと言える。

表2：国会会議録・都道府県議会会議録での「あっている」発言

(*印は non data 但し、17件以下)		九州							九州以外の地域	全国計
		肥筑(北九州)方言				豊日方言		薩隅 鹿児島		
		福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎			
方言分布図		「運動会がありよる」分布あり							兵庫以東に分布なし	
国会会議録 本会議・委員会	あ つ て い る	241	59	134	130	70	*	37	東京 46 件、愛知 20 件、島根 19 件、山口 18 件、ほか全国	955 件
県議会会議録 本会議		31	60	135	139	5	9	8	島根 7 件、鳥取 36 件、高知 24 件、山口・香川・兵庫・群馬 1 件、青森 54 件	512 件
国会会議録 本会議・委員会	あ つ て い な い	26	10	12	4	6	0	0	島根・高知・大阪・愛知・神奈川・東京・茨木 1 件	65 件
県議会会議録 本会議		4	17	15	14	0	1	0	高知 6 件	57 件

斉藤の挙げている例はすべて確認に意味を持つものしかない。それは「ありよる」「あつとる」の形を持つ北九州諸方言の話者についても、他の方言の話者についても同じである。違いは前者の頻度が高いということである。北九州諸方言の話者も(4)、(6)、(7)、(8)



のような一時的な存在、出来事の進行を表す例が会議録には現れていないようである。このような状況を言語接触の立場から、どう捉えることができるかが問題となる。意味論におけるプロトタイプ意味論を文法に適用する構文文法という考え方で解明することが可能である。「よる」「とる」「ている」の中心的な意味は意味の濃い「確認」であるとみなし、純粹のアスペクト用法は文法化によって拡張された結果可能になったと考えるのが自然である。言語接触の場面において中心的な意味を「ある」という状態動詞にも使うのは理解されやすいと考えるのは当然である。それに対して拡張的用法である一時的存在・出来事の進行を表す「あっている」は他の方言話者にとって抵抗があることが予測される。これも歩み寄りによる効果であると考えることが出来る。他の方言話者もこのような拡張をするのはそれほど抵抗がないので、自分でもやってみることがありうる。

では「ている」の中心的な意味が「確認」であるとする、なぜ基本的に状態動詞との組み合わせが起きないのであろうか。それは認知の観点から言えば、安定的な状態は中立的な知覚によって基本的に状態的な事態を全体として捉えることが可能であるということが考えられる。状態的な事態であっても、「違い」がかかわる場合には通常の中立的な知覚よりさらに努力が必要なので、「確認」という仮定が必要になると考えればよい。英語の進行形についても「出来事に近寄ってみる」という説が1920年代にすでに現在の認知言語学と同様な考えがヴァン・デル・ラーンによって提唱されている。「出来事に近寄ってみる」と「確認」とはかなり類似な考え方である。英語でも状態動詞は進行形にならないが、これも状態は近寄ってみる必要がないからだと解釈できる。

「あっている」における北九州諸方言話者と他の方言の話者の言語接触から得られるデータによって標準的な日本語では純粹なアスペクト表現とみなされる「ている」が実は認知的に中心になるのは「確認」であるという方向性が見えてきた。

### 翻訳と「ている」

翻訳も言語接触の一種である。翻訳においては原文があるので、程度の差はあれ、影響を受けることとなる。また逆に原文通りの訳では到底その言語では受け入れられないような表現になってしまう場合にはその言語にあった表現にする必要がある。翻訳と比較することによって、一言語だけを見ていると気がつかないことがわかる。原文の表現が訳文において文字通りに訳されていない場合には微妙な抵抗があることがうかがわれる。そこから原文の表現におけるなかなか気がつかないような微妙なニュアンスや発想法が意識化できるという効能がある。ここでは日本語に関するそのような微妙な観察を可能にするような翻訳の例を取り上げる。

### 韓国語と日本語

千(2007)の挙げている日本文学の韓国語訳に日本語の原文が「気がついたら、病院のベッドに寝かされていた。」であるのに、韓国語訳では「気がついたら、病院のベッドで寝

ていた。」となっている例があった。日本語の「ている」は結果状態を表す場合にその状態を引き起こした出来事を推測して述べる事が出来るが、韓国語では出来ないのが、直接確認できることしか延べることが出来ないことがわかる。結果状態の「ている」および諸方言の「とる」は引き起こした出来事の確認ではなくその結果状態の確認のみを示しているということになる。

### 「城之崎にて」の英訳からわかる「ている」の談話の流れにおける働き

日本語の「ている」は談話の中で英語では起こりえない使い方をされることがある。志賀直哉の「城之崎にて」からその例を挙げる。(19)の例では前置きとして蜂たちを観察している様子を述べた後で重要な死んだ蜂の話に入る。傍線を入れた文は実はそれまで述べたことをまとめているだけでそれほど情報量はない。この例の場合には英訳してもそれほどおかしくならない。ここで「ている」の談話の流れにおける働きについて以下の仮説を提出したい。

#### 「ている」による談話枠

「ている」による描写によってそれまでの情景における観察の姿勢を示すことによって一拍いれ、次の談話の段階へと移行する談話枠が日本語には存在する。

(19) 自分の部屋は二階で、隣の無い、割に静かな座敷だった。読み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。脇が玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目になっている。その羽目の中に蜂の巣があるらしい。虎斑の大きな肥った蜂が天気さえよければ、朝から暮近くまで毎日忙しそうに働いていた。蜂は羽目のあわいから摩抜けて出ると、一ト先ず玄関の屋根に下りた。其処で羽根や触角を前足や後足で叮嚀に調べると、少し歩きまわる奴もあるが、直ぐ細長い羽根を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ。飛立つと急に早くなって飛んで行く。植込みの八つ手の花が丁度咲きかけで蜂はそれに群っていた。自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出入りを眺めていた。

或朝の事、自分は一疋の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。

ところが(20)の例になると英訳が不可能になる。(20)ではあるひとつの葉を観察していると、ひらひらとしていたのが、風が吹いた途端に動かなくなったというのであるが、その変化が起こる直前に傍線の文が挿入されている。下に行ったのは明らかにその前の観察を述べているどこかの時点であり、風が吹く直前ではない。ところが日本人3人の英訳者を含めた8人の英訳者がその文が現れている時点でその葉の下に行ったとしており、一部の訳者は for a while を入れることにより、すぐに風が吹いたわけではないというふうに表示しているが、多くの訳者が下に行った途端に風が吹いたということにしてしまっている。ただし佐藤だけはそのときに木の下に立ったが、見続けたのはその前からというこ

とにしている。

(20) 大きな桑の木が路傍にある。彼方の、路へ差し出した桑の枝で、或一つの葉だけがヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いている。風もなく流れの他は総て静寂の中にその葉だけがいつまでもヒラヒラヒラヒラと忙しく動くのが見えた。自分は不思議に思った。多少怖い気もした。然し好奇心もあった。自分は下へ行ってそれを暫く見上げていた。すると風が吹いて来た。そうしたらその動く葉は動かなくなった。

Just as I went over to investigate from underneath the tree, a breeze came up.  
(William Sibley)

I went down and looked at it for a time. (Edward Seidensticker)

I went under the tree and looked up at the leaf. (Mark Petersen)

I went down to the foot of the tree and stood looking up at it for a while. (Roy Starrs)

Going down under the tree, I looked up at that leaf for a while. (Lane Dunlop)

But I was curious as well; I went right under the leaf and looked up at it. (羽田三郎)

I stood under the leaf and remained looking up for a while. (佐藤いね子)

I approached and looked up at the leaf. (福田つとむ)

(21) の場合には最初に「自分は何気なく傍の流れを見た。」と述べ、見たイモリの様子を描写した後に「自分は何気なく、踞んで見ていた。」と「踞んで」という情報を付け加え、「ていた」の形をとっていた。「踞んで」を付け加えたのは「ていた」形で繰り返したのではあまりにも意味がないものになってしまう。この直後に、長々と蝶・類の好き嫌いについての脱線的な話に入る前に一息入れていると考えられる。踞んだのはこの時点ではなくそれより前に起こっているはずである。ところがこの場合にも3人の日本人の訳者を含め、8人全員がその時点で座り込んだと訳している。少々違うのはピーターセンで、**I found myself squatting down to look at it.**と訳している。ピーターセンはこの箇所についてこのように訳した理由を述べている。

極端に言えば、気がついてみたら、われ知らずしゃがんでいたということだ。気づく瞬間まで意識していなかったというのは、**find oneself ~ing** という表現が、ピッタリとくる。

これだと座り込んだのはその時点であるが、無意識にしたということになる。結局英語的な談話の流れではこの時点ですでに起こったことをなぜさかのぼって述べるのかということとわからないので、この時点で座り込んだことになってしまうのである。

(21) 自分は何気なく傍の流れを見た。向う側の斜めに水から出ている半畳敷程の

石に黒い小さいものがいた。蝶・だ。未だ濡れていて、それはいい色をしていた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、凝然としていた。体から滴れた水が黒く乾いた石へ一程度流れている。自分はそれを何気なく、踞んで見ていた。

自分は先程いもりは嫌いではなくなった。蜥蜴は多少好きだ。屋守は虫の中でも最も嫌いだ。いもりは好きでも嫌いでもない。

ではなぜこの時点で「ている」形を用いてさかのぼった出来事に触れるのかについて考えてみよう。日本語では見たことを述べる際に「ている」形が出るのに対して英語では I see や I find が出る。

(2 2) 空を見上げると、鳥が飛んでいた。

(2 3) When I looked up at the sky, I found a bird flying.

日本語では可能であるが普通「鳥が飛んでいるのが見えた。」とは言わない。これは英語よりも日本語のほうが主観的なので、自分が見たというをソトから見ることをしないで、対象の様子を表す形で「ている」を用いていると見ることが出来る。しかしそれでも間接的に半分見ていると意識に反映していると解釈できる。談話の流れが変化する直前に自分のしていることを振り返って少々意識するということが起こるのである。こうしてみると日本語にしても英語にしても客観性・主観性の度合いは談話の流れのなかで一定しているのではなく、変化するということがわかる。

## おわりに

伝統的な言語研究においては純粋なある言語あるいは方言の話者からデータを得ることが目標とされてきた。しかし言語を話すということは他人とのインタラクションを前提とするものであるから一時的にせよ話し相手に対する歩み寄りが生じ、何らかの言語接触をまぬかれることは出来ない。このように言語接触が遍在的なものであるとすれば、逆手にとって言語接触の影響を受けたデータを利用しない手はない。ビッカートンの本を読んで、作家の阿部公房が文化接触から新しいものが生まれる創造性に触発されて晩年はその追及に取り掛かっていたこともそのような発想の転換があったものと見られる。確かにニカラグアの手話の出現のような特殊な例を除いて、新しくピジンやクレオールが発生することは、上層語の標準語からの影響からまぬかれ得ない現代では起こりえない。しかし言語接触は偏在的であり、言語接触によって起こっている現象をデータとして純粋なデータではないとして捨て去ることはもはや許されない。むしろ純粋なデータから得られないものが潜んでいるのである。翻訳のデータも原文の影響が残っている信頼できないデータとみなされ、排除されることが多い。しかし危険を承知しながら利用すれば、貴重な観察を得ることができる。「ている」について本稿は言語接触からのデータにより、標準的なデータで

は得られない洞察を得ることが出来ることを示した。このような方法が幅広く用いられることを望むものである。

【参考文献】

- Bickerton, Derek and Talmy Givon (1976) "Pidginization and syntactic change: from SXV and VSX to SVX," in Sanford B. Steever, Carol A. Walker and Salikoko S. Mufwene eds. *Papers from the Parasession on Diachronic Syntax*. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- 香月真由美 (2008) 「気づかない方言「あっている」についての一考察」『国会会議録を使った日本語研究』
- Long, Daniel (2007) *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*. (Publications of the American Dialect Society No.91) Duke University Press.
- 西光義弘 (1990) 「言語接触のタイプ」『言語研究』第98号、1～28.
- 斉藤紀子 (2008) 『動詞「ある」のアスペクト用法—その意味的制約とイベント性の抽出』神戸大学修士論文
- Senghas, Ann(1995) *Children's Contribution to the Birth of Nicaraguan Sign Language*. Ph. D. Dissertation, MIT.
- Shinzato, Rumiko (2003) "Experiencing self versus observing self: the semantics of stative extensions in Japanese," *Language Sciences* 25:2,211-238.
- 高木一広 (1993) 『認識と発話の過程を考慮した意味記述の試み—日本語の文末表現「た」を例に—』神戸市外国語大学修士論文
- 千英子 (2007) 『日本語と韓国語のヴォイスに関する対照研究』神戸大学博士論文
- Tomasello, Michael, Malinda Carpenter, Josep Call Tanya Behne and Henrike Moll (2005) "Understanding and sharing intentions: the origin of cultural cognition," *Behavioral and Brain Sciences*, 28: 675-691
- Van der Laan, Jacobus (1922) *An enquiry on a psychological basis into the use of the progressive form in late modern English* Gorinchem : Duym(日本語訳『現代英語進行形の研究』 / バン・デル・ラーン[著] ; 齋藤静譯註白桃書房, 1949)